＜第４回　横浜市文化財施設のあり方検討委員会　議事録＞

日時	平成２３年１１月１日（火）１６時００分 ～ １８時３０分
場所	関内中央ビル　５Ｂ会議室
開催形態	公開
出席者 （敬称略）	【委員】 嶋田昌子（横浜シティガイド協会副会長）、 末崎真澄（(財）馬事文化財団理事・馬の博物館学芸部長）、 鈴木眞理（青山学院大学教育人間科学部教授）、永池啓子（横浜市立小学校長会代表）、 長島由佳（横浜市 PTA 連絡協議会会長）、西野公晴（中小企業診断士）、 平川南（国立歴史民俗博物館館長）、吉田鋼市（横浜国立大学大学院教授） 【事務局】 鈴木（生涯学習担当部長）、中田（生涯学習文化財課長）、重松（文化財係長）、 天野（文化財係）、 【公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団】 高村（理事長）、金子（副理事長）、村井（理事）、竹前（事務局長）、 平野（横浜市歴史博物館副館長）、西川（横浜開港資料館・横浜都市発展記念館副館長）、 井上（横浜ユーラシア文化館副館長） 【コンサルタント】　山路商事（株）　山路、田代
欠席者 （敬称略）	澤野由紀子（聖心女子大学文学部教授）、桧森隆一（嘉悦大学経営経済学部教授・副学長）
議題	１　前回の報告 ２　これまでの検討の整理と基本的方向性について ３　意見交換 ４　その他
資料	資料　　第３回　横浜市文化財施設のあり方検討委員会　議事録 資料１　検討プロセスのまとめ 資料２　横浜ユーラシア文化館の方向性 資料３　横浜都市発展記念館の方向性 資料４　横浜ユーラシア文化館「収蔵品の特長」と「アピールできるテーマ」 資料５　横浜ユーラシア文化館の「展開可能性」について 資料７　平成２３年度横浜市教育意識調査の結果（速報値） ※資料６「文化財施設のあり方検討に関する小学校社会科研究会へのグループインタビュー」については、会議の中で委員会資料としない決定があった。

＜会議の開催＞

生涯学習文化財課長から、以下のとおり事前確認があった。

・会議開催の確認。（本日委員６名出席のため、委員の過半数が出席しており、横浜市文化財施設のあり方検討委員会設置要綱第６条を満たす。）

・嶋田委員、永池委員は少々遅れて出席との連絡があった。

・会議公開の了承。（会議は原則公開とする。）

・本日は、あり方検討施設４館について、今後の方向性がまとまるように議論を進めて頂きたい。

■主な議事内容

１　前回の報告

事務局から、第３回議事録について説明を行った。

（吉田委員長）

・議事録について、修正等の要望があれば申し出て頂きたい。

＜修正事項等＞

・特に異論なく、了承された。

２　これまでの検討の整理と基本的方向性について

事務局から、資料１～７について説明を行った。

＜修正事項等＞

（事務局）

・資料２について、一部訂正があった。事前に配布した資料と差し替えて頂きたい。

＜質疑応答＞

（平川委員）

・資料６の提示について、納得がいかない。現在、当検討委員会で横浜ユーラシア文化館と横浜市歴史博物館、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館について内容を検討し、どの様な形とするのが有効かを議論している最中である。その様な時期に、社会科研究会３名、指導主事２名、生涯学習文化財課２名の計７名にインタビューし、しかもその内の生涯学習文化財課は当事者である。時間も 45 分と非常に短い。横浜ユーラシア文化館が横浜市歴史博物館へ移転するかどうか、あるいは横浜都市発展記念館をどの様にするかを当検討委員会で議論していることに対し、一定の方向性を持たせるようなものに見て取れる。この様に限られた人数に対しインタビューを行ったものが、当検討委員会のような公正の場に提示されることは、現段階では不適切だと思われる。資料７については、問題はない。

（吉田委員長）

・確かにその通りである。しかも、どの様な理由でこの７名を選んだかも明確になっていない。あり方検討施設４館についてレールを敷いてインタビューした訳ではないとしても、これまでの当検討委員会ではあり方検討施設４館の方向性が明確にされていなかったため、資料６は当検討委員会に対し一定の方向性を持たせるようなものに見て取れる。資料６は参考資料とし、この様な意見を持っている方もいるのだという位

置付けとするか、若しくは破棄してしまう方が良いか。
（平川委員）
・事務局から他の資料と同等に提示されていることは納得がいかない。
（吉田委員長）
・第３回検討委員会では、横浜ユーラシア文化館と横浜市歴史博物館、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館をまとめるという大枠での意見は出ていた。そうした時にどの様になるかを先行的にインタビューしたのだろう。
（平川委員）
・しかし、第３回検討委員会議事録を見ても分かる通り、横浜ユーラシア文化館がどの様なコンセプトで、特にユーラシアという広大なエリアを対象とした館が、今後、横浜の歴史文化とどの様に繋がるかを整理することが必要である。横浜市歴史博物館と連動するにしても、施設として一体化するのか、研究面で一体化するのかを本日議論するのではないか。当検討委員会を設置したからには、先ずは検討委員会の委員で議論し、それを受けてインタビュー等を行うべきである。資料６の内容はあまりにも先行的であり、公正であるべき当検討委員会に支障をきたすものである。よって、資料６は事務局が資料として提示するには時期早尚である。
（西野委員）
・資料６はどの様な経緯で作成されたのか。
→当検討委員会の中で学校利用の話が度々出ていたことと、学校側からはどの様に考えているのかを知ることも検討材料の一つとなるのでは思い、インタビューを行い資料作成に至った。委員の皆様が、あまりにも先行的であると感じてしまうのであれば、資料としての適性が問われる。（事務局）
（西野委員）
・少なくとも、当検討委員会であり方検討施設４館の方向性が出された後、それに対してインタビューを行うという順序が適切である。
（吉田委員長）
・資料６は削除することとする。
（鈴木委員）
・あり方検討施設４館について外部評価が出ているとの情報を得たが、その報告書等は当検討委員会において既に資料として配布されていたか。外部評価の報告書が出ているならば、それこそ当検討委員会で目を通さなければならないものである。
（吉田委員長）
・第１回検討委員会で提示された、横浜市外郭団体等経営改革委員会の資料とは異なるものか。
→それとは別に外部評価が毎年行われている。報告書はＨＰで公開されている。現在の各館の運営状況に対しての評価がなされており、今回はそれを少し超えた形で施設のあり方を見直そうということであるため、資料として提示していない。必要であれば改めて提示する。（事務局）
（末崎委員）
・第３回検討委員会で配布された横浜市教育振興基本計画の重点施策の基として利用さ

れているのか。
→直接的な関わりはなく、基本的には外部の評価委員が指定管理施設の各事業運営に対し、項目ごとに評価を行っている。（事務局）
（吉田委員長）
・資料７の横浜市教育市民意識調査は、当検討委員会のために実施したものか。
→当検討委員会のために実施された調査ではなく、数年おきに本市の教育施策に対する市民の意識を定点的に把握するために実施している。検討の参考になればと思い、資料として提示した。（事務局）
（平川委員）
・資料の構成について、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館との複合館とする、若しくは統合するということが整理された資料が先に提示されており、資料４・５が後に提示されている。第３回検討委員会において、横浜ユーラシア文化館の「収蔵品の特長」「アピールできるテーマ」をどの様に展開すれば横浜の歴史文化と連動するかについて横浜ユーラシア文化館の職員に説明して頂き、その説明を受けて、これであれば横浜市歴史博物館と連動していけるだろう、また、学術研究で連動するのか施設として連動した方が良いのかということを、第４回検討委員会で議論することとなっていた。資料を拝見すると、横浜ユーラシア文化館が横浜市歴史博物館と一体となれば、学校利用が増え活発になるということしか強調されていない。それは違うのでないか。横浜ユーラシア文化館の方向性が曖昧であることを市民からも指摘を受け、既存の活動に対し十分な理解を得ることができていないために、当検討委員会において検討していくという経緯がある。個人がコレクションしたものを基盤とした大変難しい館のあり方ではあるが、それらを維持して発展させるための可能性を横浜ユーラシア文化館から説明して頂き、それを受けて当検討委員会の委員が、それならば横浜市歴史博物館と施設として連動する、若しくは学術研究で連動するということも選択肢として有り得るだろうと議論すべきである。横浜ユーラシア文化館が何を特長としこれからの発展を目指すかが明確にされてから初めて、もし横浜市歴史博物館と一体化したならば学校利用が促進され、活発な活動が展開できるという議論の流れになる。まだ何も整理されない内に、横浜市歴史博物館は学校利用が多いため一体化し、その流れに乗ることができれば横浜ユーラシア文化館も良いという表現があちらこちらに見て取れるのは本末転倒である。
（吉田委員長）
・本当は第２～３回の検討委員会で議論しておくべき内容であるが、本日は配布されている資料に基づいて議論を進めていくということで御了承願いたい。
（末崎委員）
・私立博物館や自治体の博物館は条例で、また最近では公益法人にあっては定款という形で設置されている。条例が理念に近いものだと解釈して構わないのか。または理念は全く別のものだという解釈が正しいのか。
（平川委員）
・理念は既にある。しかし現実に市民から見た時に、横浜のユーラシア文化とは何を目指しているのかが分かりづらい、また、あまりにも広いため学校側も子ども達にこれ

がユーラシア文化であると説明しても漠然としてしまう。国際都市横浜であるために横浜ユーラシア文化館は大変有効であるということになると、現在横浜ユーラシア文化館が所蔵している資料を活かして、横浜のどこと連動することが可能かという議論になる。どこかに接点を見出さなければならない。元々が個人のコレクションということで制約があるが、横浜ユーラシア文化館ではこの様なことが分かるのだというメッセージを伝えることが重要である。歴史の専門家であっても容易には理解し難い。市民や子どもたちは尚更である。漠然としていたのでは、いくらグローバルと言っていても目的は達成されない。横浜の地域博物館である横浜市歴史博物館と本当に連動できるかどうかを問うべきである。

３　意見交換

（末崎委員）

・江上氏コレクションの寄贈を受けるに当たり、江上記念館ではなく横浜ユーラシア文化館と館名を決めたのは横浜市である。当初の趣旨、設置目的が大雑把であったのか。

（西野委員）

・私が第３回検討委員会で質問したように、ユーラシアの範囲はどこを指すのかということがやはり問われることとなり、非常に難しいところである。

（末崎委員）

・横浜ユーラシア文化館から、どの様な方向性で運営していきたいのかを説明して頂きたい。

（平川委員）

・資料４、５が該当する資料だろう。

（吉田委員長）

・第３回検討委員会で横浜ユーラシア文化館からは現況等説明と今後の方向について説明がなされた。重複する点もあるが再度資料４、５について説明して頂けるか。

→第３回検討委員会での検討内容も踏まえ資料４、５を作成した。改めて横浜ユーラシア文化館より説明させて頂く。（事務局）

（井上副館長）

・第３回検討委員会で承った要望は、横浜ユーラシア文化館にはどの様な資源があり、そこからどの様な未来が描けるかというものと認識している。資料４左頁に、横浜ユーラシア文化館の収蔵品について記載している。物としての資源以外に、ユーラシアに関する文献をきちんと読むことのできる専門の学芸員が３名おり、それも資源であると考えている。収蔵品に関して、資料４では江上コレクションとその後の寄贈・寄託資料という形で分けて記載している。江上コレクションについては、世界的に貴重なオロンスム文書と楔形文字粘土板文書等を所蔵し調査研究を進めている。また、文献資料は約 25,000 冊所蔵している。強調したいことは、その後の寄贈・寄託資料が増えているということである。横浜ユーラシア文化館が発行している横浜ユーラシア文化館ニュースにて、新収蔵資料に関してビジュアルに紹介している。

（吉田委員長）

・新収蔵資料について、現在、量的にはどれ程収蔵しているのか。

→新収蔵資料について、考古・歴史・美術・民族資料が約 500 点、写真資料が約 850 点、寄贈図書が約 700 冊である。これらは、最新号の横浜ユーラシア文化館ニュースの P. 8～11 に紹介している。新収蔵資料の中には、企画展を開催することのできる資料もある。第２回検討委員会の施設見学時に委員の方々に見て頂いたフィリピン展は、新収蔵資料により開催された。（井上副館長）

（吉田委員長）

・新収蔵資料は全部で約 2,050 点であり、横浜ユーラシア文化館の収蔵品が占める割合は圧倒的に江上コレクションが多いと思っていたが、まずまずの量である。

（井上副館長）

・強調したいのは、その後も寄贈・寄託資料が増えているということである。来週は大阪にゲルを頂きに行く予定である。これら横浜ユーラシア文化館の収蔵品の中で、どの様な事業展開ができるかを、資料４右頁に図示している。企画展と調査研究については、従来から取り組んでいる。調査研究について、収蔵資料の研究に関してはまだ伸びる余地がある。また、平川委員からも指摘されたように、ユーラシアという概念を突き詰める研究も必要である。江上コレクションや江上氏の業績の研究も必要である。企画展について、地域間交流の視点を重視し、地域をバランス良く紹介すると記載してあるが、「知られているユーラシア」「知られざるユーラシア」という意味では、フィリピン展は「知られていないユーラシア」であり、今回のエジプト展は「知られているユーラシア」と言えるだろう。また、横浜周辺にはたくさんの在日コミュニティがあり、その方たちのアイデンティティを確認するような企画展を開催していく。そして、日本文化の形成とユーラシアの関係性をテーマとして実施する。第２回検討委員会で日本文化はユーラシア文化により形成されているとの発言があったが、日本でこの様な視点での企画展はなかなか実施されていない。市民協働や普及啓発活動、学校連携については、残念ながらこれまで取り組んでこなかった。市民協働については、ようやく相模原市や横浜市の施設と企画を持つことができるようになった。また、フィリピン展の際に、63 名の市民ボランティアの方々に試験的に加わって頂き、活動支援を行って頂いた。今後エジプト展においても加わって頂き、全部で 120 名の市民ボランティアに活動支援を行って頂く。普及啓発活動については、市民活動の視点から普及活動を展開していきたいと考えている。異文化理解・交流と生涯学習ということで、講座や講演会、ワークショップ、イベントなどを市民の方と一緒に協力し、知恵を出しながら実施していく。最後に学校連携について、ユーラシア文化という広い概念のため、学校とのつながりも社会科や美術・図工、国際理解、総合学習と幅広いものになる。特に日本史とのつながりを通じて世界を意識させたい。更に、団体学習やグループ学習、職場体験、インターンシップ等での活用も目指していく。今年 10 月から横浜ユーラシア文化館は横浜都市発展記念館と連携し、学校団体の受け入れを開始した。現在 23 校の予約があり、年内 60 校の受け入れを目標としている。受け入れは３クラス／１回としている。昼食時には最大で 176 名、雨天でも 114 名来館した学校があり、非常に好評である。先日、更に７校の申し込みがあった。近隣に神奈川県庁や神奈川県警察本部があるため、セットで来館して頂けている。来年の春から指定管理の期間内に、200 校の受け入れを目標としていきたい。平成 27 年の指定管理期間

が終了するまでに、３万人を超える来館者を目標としている。

（吉田委員長）

・現在の旧市外電話局のままでも、横浜ユーラシア文化館は学校連携等について問題はないとのことか。

→資料２にも記載されている通り、横浜歴史博物館と一体化することとなれば概算でも52,000 人と格段な入館者増が見込める。現状のままではその数字には及ばない。（井上副館長）

（吉田委員長）

・資料５について、事務局より説明を行って頂く。

（事務局）

・資料５は、井上副館長から説明があった資料４を受けて作成した。横浜ユーラシア文化館がアピールできる５つのテーマを柱とし、それらをどの様にして発揮できるかを整理した。館のポテンシャルを活かした展開可能性については、学校連携（青少年がユーラシアの多様な文化を学習体験できる場）、生涯学習（異文化理解・交流活動の場を創造し、市民の生涯学習を支援する場）、展示（収蔵資料の特長を活かした展示を通じて、ユーラシアに関する理解を深める場）、市民協働（特徴あるテーマの博物館として、市民と協働した事業運営が活発に展開できる場）、調査研究（日本で唯一ユーラシアという広い世界観を扱い、その成果を公開する場）と整理した。今までの状況については、これまで課題となっていることを整理し記載している。今後、展開可能性を実現するためには、社会、美術・図工、国際理解、総合学習等、学校連携の中で館を活用することが必要、市民向けの生涯学習事業や文化交流事業をさらに充実することが必要、ユーラシアを日本との交流や文化への影響から捉え直すなど、利用者の興味・関心を高めるわかりやすさが必要、市民とのネットワークづくりやボランティアの積極的な活用等により、市民感覚を加えた魅力ある博物館をつくっていくことが必要、研究成果を効果的に発信する工夫が必要、と整理した。これらを横浜市が所管している４館の中でどの様にすれば最適なのかを考え、もしも横浜市歴史博物館へ移転した場合にどの様になるかを整理した。学校連携については、市内小学校は横浜市歴史博物館には必ず行くため、一ヶ所で日本の歴史とユーラシアの歴史に触れることが可能になる。展示については、横浜市歴史博物館との連携により、ユーラシアと日本の歴史（横浜の歴史）とのつながりや比較などの研究・展示等が可能となり、また、ユーラシアの多様な文化が日本の文化形成に与えた影響等、新たな視点から展示を行うことができる。現在、横浜ユーラシア文化館の施設規模が狭いということから、横浜市歴史博物館の屋外施設や研修施設等を活用した展示の工夫や講座や講演会、ワークショップ、イベント等、多様な事業展開が展開できる。市民協働については、横浜市歴史博物館の既存の歴史愛好グループ等を参考として、展示や研修など新たな活力を博物館に与えることができる。以上のことが、横浜市歴史博物館へ移転した場合の効果として考えられる。

（末崎委員）

・横浜ユーラシア文化館が所蔵する江上コレクションは、実際はかなりの民俗資料等が揃っている。素晴らしい考古資料もあるが、特に、素晴らしい民族衣装が揃っている。

更に、新収蔵資料としてアフガニスタンの民族衣装（20 世紀）等が 352 点も収蔵されている。専門的な資料と現代に近い民族資料が共存している。理念を語る上で、国際都市という意味では十分な資料が揃っている。古書についても、大英博物館の東洋部長であったバジル・グレイの旧蔵書が、丸善に買い取られるところを江上氏が買い取り、横浜ユーラシア文化館に収蔵されている。この様な資料は専門的であるため、専門の学芸員の方が必要となったのだろう。これからは分かりやすい展示を心がけて行っていけるかが重要である。

（吉田委員長）

・その他に新収蔵資料として、オロンスム遺跡等採集陶磁破片（元代）等 26 点が収蔵されているようだが、オロンスム関係の新収蔵資料はこれ以外にもあるのか。

→オロンスム遺跡等採集陶磁破片（元代）等 26 点だけである。（井上副館長）

（吉田委員長）

・資料の価値については誰も文句の付けようがない。それらをどの様に上手く活用していくかが課題である。横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移転させるかどうかは、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館へも影響を及ぼすため、そのことも考慮しながら議論する必要がある。

（平川委員）

・末崎委員が発言された収蔵品に関しては、もう少し整理する必要がある。果たして現在の横浜ユーラシア文化館の収蔵品で、ユーラシア文化の形成期から現代までを通史的に描けるのか。現在横浜ユーラシア文化館の収蔵品を中心とし、今からでも足りない資料を補い通史的なものを作り上げなければ、単発の資料を並べるだけでは予備知識のない子どもは勿論、市民にも歴史展開の理解が得られないだろう。それらを常設化するのか、企画展とどの様に絡めるかも検討しなければならない。また、一つの館が所蔵している資料数として、約 3000 点では決して多いとは言えず、ユーラシアを全て語ることは困難である。生業や住居、衣食住等どこかにテーマを絞る必要があるだろう。

（吉田委員長）

・現在の新収蔵資料は、江上コレクションの保管が目的ではなく、ユーラシアの資料ということで収集したものか。

→その通りである。企画展を開催すると、ユーラシアに関する資料があると市民の方から寄贈して頂ける。（井上副館長）

（吉田委員長）

・積極的に江上コレクションを相対化しようとするものではなく、たまたま寄贈され新収蔵資料となっていると認識して構わないか。どこに重点を置くかは非常に難題であり、あまり明確にせず現在に至るということか。

→ユーラシアという概念が壮大であるため、そうならざるを得なった。（井上副館長）

（平川委員）

・最大の課題は、一方に横浜市歴史博物館があることである。横浜市歴史博物館は、横浜の歴史文化を通史的に取り扱っている。横浜ユーラシア文化館が現在の様な江上コレクションのままの形で展示を行うとすると、たとえ別室にしたとしても極めて違和

感があり連動性を図ることはなかなか困難であろう。文化としてどこかでつながることはあっても、そのつながりまでを見る側に要求することは酷である。同じように広く見て頂くためには、物だけではなくつなぐ工夫が必要である。その際、どこに焦点を当てるかを明確にしなければならない。例えば、生活文化に焦点を当て、変遷が分かるような形で見る側に優しく展示を行えば、横浜の地域、歴史文化と様々な場面でつながるだろう。貴重な資料もあるだろうが、これだけのコレクションだけを並べても上手くいかないだろう。

（吉田委員長）

・横浜ユーラシア文化館が横浜市歴史博物館と連携することにより、ユーラシアと日本の関わりをより深く考える方向へいくきっかけにはなるだろう。確かに現在のままどこかへ移転させても、場所が変わるだけで同じことである。何かのきっかけでそれらを活かす方法を決めなければならない。

（末崎委員）

・民俗の文化比較、例えば江戸時代の暮らしと中国やユーラシアの暮らしの比較等、イメージで分かるようなものは可能だろう。その様なスペースを確保できるかは分からないが。

（吉田委員長）

・横浜市歴史博物館の遺跡公園は非常に広いスペースがある。「ニュータウン・ドリーミング～遺跡とアート～」を開催していたのを先日見学に行った。様々なやり方があるだろう。

（末崎委員）

・現在の施設ではスペースが狭すぎる。展示ケースも固定されているため、展示物が限られてしまい、小さい展示ばかりになってしまっている。ストーリーを語るには困難である。もう少し大きい展示ができると子どもにも楽しめるだろうし、理解しやすい。話は少し変わるが、現在、横浜市歴史博物館では新聞社やＴＶ局の巡回展を受け入れているのか。

→過去には何度か受け入れていたが、現在の指定管理状況では予算が確保できない。できることならば、受け入れたいという思いはある。負担金額が少ないものは現在でも受け入れている。（平野副館長）

（末崎委員）

・現在、九州国立博物館では「草原の王朝　契丹（きったん）～美しき３人のプリンセス」が開催されており、東京藝術大学大学美術館でも開催される予定である。マイナーなものでもユーラシアに関するテーマの企画展を開催し、それをきっかけに知名度が少しずつ上がり、寄贈も少しずつ増えていくことが理想であると思っている。経済事情が厳しいため、その様な企画展がなくとも来てくれる所を探す方法もあるだろう。

→一般的に巡回展には 1000～1500 ㎡必要だと言われている。横浜市歴史博物館は大きいと言われているが、非常に狭い。企画展示室は約 362 ㎡しかない。とてもではないがその様な大きな展覧会は受け入れることが不可能である。（平野副館長）

（末崎委員）

・先程、井上副館長からお話のあった横浜ユーラシア文化館が目標とする入館者数につ

いて、今後３万人の入館者を得ることが可能となるのならば、横浜市歴史博物館への移転はないことになるのか。

→目標値について、どの程度入れば合格とされるのかは分からない。学校誘致や普及活動、市民協働に取り組み、指定管理が終了する平成 27 年度には約３万２千人にしたいと考えている。（井上副館長）

（長島委員）

・小学校の来館が増えるとのことだが、何校ほど増えるのか。また、何年生が何を学習しにくるのか。

→今年 10 月から受け入れを開始し、現在 23 校の予約がある。学年は主に４年生であり、「昔の暮らし（吉田新田）」と併せて「身近な生活」を学びに来る。（井上副館長）

→横浜ユーラシア文化館は横浜都市発展記念館と併設されているので、学校誘致のために横浜都市発展記念館に吉田新田コーナーを新設した。同じ建物内のため、両館見てくれると見込んでおり、来館者が増えている。（生涯学習担当部長）

（長島委員）

・吉田新田の勉強のために横浜都市発展記念館に来るが、横浜ユーラシア文化館への目的は特にないということか。

→横浜ユーラシア文化館では、ハロハロ展等の企画展で海外の民俗文化を勉強できる工夫や他文化共生への取組を現在でも懸命に行っている。吉田新田による取組での集客力も期待できる。しかし、私も設置者として、どれ程入館者を得ることができれば正解とされるのかは分からない。３万２千人というのは、あくまで指定管理者の想いであって責任を伴うものではない。当検討委員会で検討される施設の再編等は、設置者である市の責任と権限で行われるものであり、仮に３万２千人に達しなかったからといって指定管理者に責任を負わせるわけにはいかない。我々が責任を全て負わなければならないため、より確実な形で来館者が増える方法を選択している。（生涯学習担当部長）

（長島委員）

・吉田新田コーナーによる学校誘致を行わなければ、有り得ない話なのか。

→その際は、また別の方法を考えていくだろう。（生涯学習担当部長）

（長島委員）

・横浜ユーラシア文化館がアピールできるテーマの一つとして掲げている「学校連携」において、インターンシップでの活用とあるが、具体的にはどの様なことか。

→中学生に博物館の仕事を体験してもらうものである。吉田新田コーナーが設置される以前から受付を行っている。（井上副館長）

（長島委員）

・横浜ユーラシア文化館へ来る生徒たちの学習目的は何なのか。

→生徒たちの学習目的は、吉田新田であることは間違いない。（井上副館長）

（長島委員）

・横浜ユーラシア文化館が所蔵している資料は「点」であり、文化的な流れがない。単に所蔵資料の展示場所となっている。例えば歴史教科書の様に、世界の歴史と日本の歴史を一目で比較できる同時年表を用いて子どもたちの学習にスポットを当てていく

とすると、民族衣装やお箸文化の起源等、江上氏のコレクションが点として活きてくるのではないか。現在の収蔵品を活かすには、点として活かさなければ勿体ない。横浜ユーラシア文化館では努力して企画展等を実施されているが、それも点でしかない。最終的に当検討委員会があり方を検討するのであれば、如何にしてそれぞれの収蔵品や施設をより良くするためには、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移転し素晴らしい収蔵品を「点」として展示を行い、旧市外電話局は横浜開港資料館と横浜都市発展記念館で有効活用するべきである。

（鈴木委員）

・横浜ユーラシア文化館が移転してくることに関して、横浜市歴史博物館がどの様に考えているのかをお聞きしたい。また、来館者数が増えるという発想について、単純に増えるかどうかは疑問がある。限られた時間で見に来る来館者もいる。１＋10＝11 になれば良いが、ただ 10 に取り込まれるだけなのか、下手すると９や８になってしまう可能性もあり、考え方が楽観的過ぎる。また、学校教育に頼り過ぎているのではないか。確かに学校を誘致すれば確実に来館者数は増えるが、資料７にも提示されている通り、文化施設に対する興味は小学生で 77.3％あるのに対し、中学生では 57.1％と減少しており、大人になればもっと減少するはずである。今、来館者数を増やせば良いという安易な考えではなく、根本的なことから考えていかなければならない。来館者数が少ないことは当然である、江上コレクションを所蔵しているといっても若い方は来ない。それでもこれだけ来館者数を得ているという話になるべきである。我々は博物館であり総合的な施設であるため、資料収集や調査研究、保存、教育も行っており、トータルして評価して頂きたいと主張していかなければならない。来館者数が少ないから駄目だという評価に対抗するような基本的な考え方を持たなければならない。その基本的考え方が不安定では対抗するのは不可能である。基本的な考え方と、その上で現実にどの様な対策が必要かを検討する二段構えでいかなければならない。

（吉田委員長）

・横浜市歴史博物館はどの様に考えているのかお聞かせ願えるか。

→当検討委員会は教育委員会主催であり、我々はオブザーバーという立場である。お答えすることは控えさせて頂く。（高村理事長）

（鈴木委員）

・これまで自分たちでまとまったことを取り組んできているのに、突然他の館に入ってこられても困るという考えがあるのではと懸念している。しかし、現在の状況ではやむを得ないという想いもあるだろう。

（平川委員）

・横浜市歴史博物館は、横浜の地域博物館として遺憾なく活動し、トータルした横浜の非常に身近な歴史文化を扱い、横浜都市発展記念館では吉田新田、横浜開港資料館とそれぞれが地域に密着した形で歴史文化を掘り起こし、それに学校や市民も対応してきている。横浜ユーラシア文化館の難しさは、一つ一つが貴重な所蔵資料であっても、それらを横浜の地域として十分に連動させることができるかどうかにある。それを考えることが第一である。その連動の仕組みが確立した段階で、初めて横浜市歴史博物館との連動が有り得るのかを考えるべきである。学術的な連動もあり得る。横浜ユー

ラシア文化館のスタッフがいくら優秀であっても、日本文化の形成とユーラシアの関係性という深い理念の基にテーマを追求するのは良いが、意識的には難しいだろう。横浜市歴史博物館と統合した時に、横浜ユーラシア文化館が充分機能しない可能性もある。現在横浜ユーラシア文化館では、様々な工夫をしながら企画展を行っているが、現在の場所であれだけの面積では通史的な展示は困難であるとした場合、企画展を定期的に実施し、収蔵品を活用していくというのも有り得るだろう。そうすれば、今回のフィリピン展の様に、収蔵品から選びながらユーラシアの様々な、特に生活文化を一つのテーマにし各地の生活文化を紹介すれば、横浜という地域の歴史という見方もすることができ、グローバルな視野となるだろう。

（吉田委員長）

・横浜市歴史博物館にとって、横浜ユーラシア文化館が来るということでプラスになる面はあるか。

→我々はオブザーバーという立場であるため、意見を求められても困る。事実をお答えすることはできるが、考え方を求められても我々は意見できる立場ではない。（高村理事長）

（嶋田委員）

・ユーラシア文化というと遊牧民族を思い浮かべる。例えば、馬の博物館との連携や、シルク貿易で横浜は発展したが絹は他国から入ってきたものであることから、近隣のシルク博物館と連携して企画展を実施できないか。運営団体は異なるが、連携して企画展を実施することは、選択肢として有り得るのではないか。

（平川委員）

・生活文化を馬や絹でつないでいけば可能であろう。そもそもの文化の広がり、ユーラシアの歴史を見ることで、地域の博物館でありながら常に世界に目を向けている施設になり得るだろう。形態はともかく、横浜ユーラシア文化館が今後、所蔵資料を有効に活用していくためには、身近なテーマと横浜に関連づけて辿っていく企画展を実施できれば、興味を示して頂けるのではないか。

（嶋田委員）

・シルクの歴史を辿ればユーラシアに行きあたり、馬の歴史を辿ってもユーラシアへ行きあたる。そうすると長島委員が発言された横に並べるということは、歴史的に横に並べることもあれば、地域的、地理的に並べるという考え方もできるだろう。その中には歴史が流れている。

（鈴木委員）

・横浜ユーラシア博物館は独立した博物館であるという発想ではなく、コレクションの所有者という考え方も有り得る。職員がいてコレクションの調査研究、保存管理は行うが拠点を持たず、横浜市歴史博物館等、様々な場所とタイアップし企画展を実施することも可能だろう。現状の施設をどの様に統合するかではなく、この際、博物館という概念をなくし、拠点を持たない博物館という扱いにしてはどうか。そもそも活用が難しい物を何も考えないで貰ってしまったことが間違いである。博物館を持たなければならないという発想を改めることも考えの一つである。

（長島委員）

・横浜ユーラシア文化館という名称は残さなければならないのか。鈴木委員が発言された様な施設を持たない形態をとれば、「点」として様々な所と連携することも可能だろう。

→まさに資料２・Ｂ案がそれに該当するものであり、名称もなくしてしまうことになる。（事務局）

（嶋田委員）

・福岡や北海道では、日本という狭い観点ではなく、広くアジアを見ている。例えば北海道ではアイヌ民族等、様々な民族の中にいるという視点を感じることができる。その様な役割を担う場を横浜ユーラシア文化館は持っている。横浜ユーラシア文化館を外すことは横浜を狭くしてしまう。世界の中の、アジアの中の、横浜という広い視点の中で考えるべきである。

（生涯学習担当部長）

・あえて言わせて頂けば、横浜ユーラシア文化館をなくす理由があるのか、条例を廃止しなければならない、指定管理者も切らなければならない、そこまでして良いのかは疑問がある。嶋田委員が発言された様に、ユーラシアの中の日本ということをきちんと明確にすれば、横浜ユーラシア文化館を残す意味はある。また、学校教育に頼り過ぎているという発言があったが、そうではなく、これだけ素晴らしい江上氏のコレクションを一人でも多くの方に見て頂きたいという気持ちがあり、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移設した方が確実に見てもらえるだろうと考えてのことである。長島委員からも発言があったように、子ども達は通史でなくともポイントで比較するものがあれば世界に目が向くだろうという発想である。むしろ体系的でない物を一つの独立した館でやっていけるのか。現状がそうである。しかし、その現状で上手くいっていないため、我々が所管している施設の中でより有効に、一人でも多くの方々に興味を持って頂けるようにと模索しているのである。正直に言って、単独館としてやっていく自信はない。企画展を実施すれば良いとの発言もあったが、去年シャルジャ展を巡回展ではあるが実施し、シャルジャ王国の秘宝を日本初公開した。シャルジャ首長国大使や横浜市長も出席しオープニングセレモニーを催し大々的に新聞にも掲載されたが、来館者を得ることはできなかった。そこまで一生懸命に取り組んで頂いている館に対し、それでも来館者が得られない場所でもっと来館者を増やせと言うのは非常に心苦しい。そこで、少し違う視点で見ることができないかと考えているのである。古代オリエント博物館へ行くと、長島委員が発言された同時年表を見ることができる。都市国家バビロンのハンムラビ法典が展示されており、その当時日本は縄文時代であったことや、バビロンには文字が存在したが日本には文字がまだなかったこと、そしてその当時はバビロンの方が栄えていたが、今では日本の方が栄えているということ等を、子ども達に考えさせるきっかけになるのではと思い、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移設した方が良いのではと考えているのである。そして末崎委員が発言されたように横浜市歴史博物館には広い遺跡公園もあるため、ゲル等を設置することができれば子ども達の興味がより湧くのではと考えている。決して学校に頼っているわけではない。

（吉田委員長）

・博物館は学校教育の中でも大きな役割を担っているだろう。学校側からすると、横浜ユーラシア文化館は独立館としてあった方が利用し易いのか。

（永池委員）

・学校教育の観点としては、「点」として子ども達に見せるのではなく、世界の中の日本という考え方で、比べて考えさせる、つなげて考えさせることが重要である。子ども達にその様な場があり、日本の歴史を知ると共にユーラシアとのつながり中で教育の場が持てることは魅力的であると感じている。２つを並べて比べることで、日本の発展もまた分かるのではないか。

（吉田委員長）

・２つを並べることも、そう簡単なことではないだろうが、一つの方法としては有り得る。

（末崎委員）

・横浜ユーラシア文化館が独立館として、横浜市歴史博物館の近隣に新設することは可能か。

→それは困難である。（事務局）

（鈴木委員）

・報告書としてどの様にまとめるかも検討する必要がある。現実的な案と当検討委員会で議論し考えたいくつかの案があってもよいだろう。

（生涯学習担当部長）

・第３回検討委員会にて嶋田委員より、収蔵庫問題についてもきちんと考えるべきとのご発言を頂き、横浜ユーラシア文化館が横浜市歴史博物館へ移転することにより、僅かではあるが 200 ㎡以上が新たに確保できる案を資料２で提示している。また、子ども達が昼食を取ったり、関内地区を見学するためのガイダンスを受けるスペースを設けることが可能な案となっており、これまでの議論の全てに関連している案となっている。

（西野委員）

・旧市外電話局の家賃は発生しているのか。

→旧市外電話局は横浜市の所有物である。（生涯学習担当部長）

（西野委員）

・経済的観点から意見を言えば、旧市外電話局を倉庫に使用することは有り得ない発想である。倉庫は外部に確保すべきである。

→現在、外部倉庫だけで 350 万円／年間も支払っている。（生涯学習担当部長）

（西野委員）

・旧市外電話局を他の機能としての活用や、他に貸すことも有り得るのでは。旧市外電話局は一等地であり、使用したい企業も多いだろう。多目的利用室が新設されるとしても、倉庫が大半を占めるというのは勿体ない。

（平川委員）

・ほとんどの博物館は広い敷地を得るために、交通の便が悪い場所に立地している。あれだけの一等地にある施設が、来館者数が少ないという指摘を受け、あり方の検討を迫られていることから当検討委員会が始まっている。何故、あれだけ交通の便が良い

場所にありながら、横浜ユーラシア文化館と横浜都市発展記念館が注目を浴びないのかを考え、もし有効な打開策があれば変えていく必要はある。横浜都市発展記念館について、時代区分の明確化、設置目的の明確化により市民に分かるような形で、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館が良い意味で差別化を図り、２館が同等の価値がある、横浜の近現代の歴史を語るには２館に分けて取り組んでいくということが鮮明になれば、横浜現代都市資料館と横浜開港資料館として併存していくことは問題ない。問題は横浜ユーラシア文化館であるが、当検討委員会での議論の中で横浜ユーラシア文化館の形が少し鮮明になってきた。資料を徹底して活かしたあり方、どの様にして横浜の歴史文化と連動させるか、横浜という地域の国際性を横浜ユーラシア文化館でもっと生活文化に根差した形で、分かりやすい形でつなげていくかを試みる必要がある。最初から、わざわざ交通の便が悪い場所へ移転する必要はない。横浜市歴史博物館はきちんとしたコンセプトで活動しているため、そこへ横浜ユーラシア文化館が移転しても、確かに比較することは可能だろうが、横浜市歴史博物館の展示と横浜ユーラシア文化館が連動するかと言えば、そう簡単ではない。現在の収蔵品に限っても、あるいは通史を扱うにしてもスペース的な制約は横浜市歴史博物館にもある。横浜ユーラシア文化館の性格を鮮明にすることも一つの案として有り得る。

（嶋田委員）

・教育委員会だけでなく、横浜市の他局が所有している施設で使用できる場所は全くないのか。第３回検討委員会にて教育委員会が所有する施設では、使用できる場所はないとお答え頂いたが、この課題は教育委員会だけでなく横浜市全体で考えるべきではないか。例えば情報文化センターの上層部に横浜ユーラシア文化館が入ることは不可能か。新聞博物館と情報文化センターの建物が博物館センターのようにならないか。

→隣の情報文化センターの上層階に横浜ユーラシア文化館が移転することで、果たして来館者が増えるだろうか疑問である。（生涯学習担当部長）

（嶋田委員）

・横浜ユーラシア文化館が横浜にとって大切であると考えるならば、更に資料を収集し、横浜が「点」ではなくアジアの一環としての考えを体系化し、発展的に設置してはどうか。実際に横浜ユーラシア文化館では来年、企画展としてインド展を実施するとのことだが、横浜ユーラシア文化館の持っている意義は、決して軽いものではない。

（西野委員）

・横浜ユーラシア文化館の現状は、経営観点からすると、立派な理念がありながら様々な物理的な諸条件によってねじ曲げられ、中途半端になっている。今後どちらの道に進むかを考えた時、理念に沿い、平川委員が発言された様に収蔵品だけで足りなければ複製で補ってでも通史を作り上げ常設展示と企画展示を含めもっと立派に行うか、または展示を止めてしまい収蔵だけに特化するかという分岐点にきている。その時にハードの課題とコストの課題に直面するのだが、旧市外電話局を思い切って横浜ユーラシア文化館だけで運営できるかどうか、条件が整い横浜ユーラシア文化館がもう一度きちんと理念に沿って活動できるのであれば、その様にした方が良い。場所が足りなくなった横浜都市発展記念館の収蔵庫等は、横浜開港資料館の外部倉庫と併せて必要な分を借りればよい。コストは上がるが、資料３のイニシャルコスト（概算）に約

４億円とあり、例えば10年で償却しようとすると約４千万円／年間、20年で償却しても約２千万円／年間である。外部倉庫を借りるのに 350 万円／年間であるなら桁は違う額で立派な倉庫を借りることができる。外部倉庫を借りてでもユーラシア文化館に３億８千万円をかける、このイニシャルコストには年度事業という行政の観点も含まれており難しい部分はあるだろう。ただ、一度に費用をかけるのではなく、長年に渡ってかけるというコンセンサスを得ることができれば、外部倉庫を借りて物理的に収蔵する形も有り得る。旧市外電話局の建物自体が歴史的に価値のあるものであり、横浜ユーラシア文化館の中途半端な現状を再生できるのであれば、旧市外電話局を全部横浜ユーラシア文化館にし、横浜都市発展記念館は横浜開港資料館と一体化し、足りなくなった収蔵庫は外部に借りるという考え方も、これだけのイニシャルコストをかける覚悟があるのならば有り得る。学校利用について、様々な努力をされ３万人超を呼び込めるということであったが、多目的利用室も一体となって設置できるため昼食場所等の確保も可能である。現在の横浜市歴史博物館において、約７万人の利用者の内、学校団体利用者が約４万人、すなわち学校利用割合 57%であり、横浜ユーラシア文化館も同じ場所にあれば 57%の学校利用割合を得られるという考えをされているが、それは正面から見た理念に沿うものではない。

（吉田委員長）

・横浜としては、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館は横浜の歴史そのものを扱っており、外部倉庫を借りたとしてもそれらが縮小される、都市発展記念館がなくなるということには少し抵抗感がある。

（西野委員）

・先程の発言は資料３にもあるように、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館の展示スペースを横浜開港資料館へ一体化し、旧市外電話局の大半を収蔵庫にするという案に対し、それならば旧市外電話局は横浜ユーラシア文化館とし、足りなくなった収蔵庫は外部に借りてはどうかというものである。

（生涯学習担当部長）

・横浜ユーラシア文化館の中に吉田新田コーナーを設置するということか。そうでなければ３万人超もの来館者は得ることは不可能であろう。

（西野委員）

・得られるようにしなければならないことが、元々の理念ではないのか。非常に矮小化されている様に感じる。私は経済的観点から当検討委員会に参加しているが、鈴木委員も発言されたように、単純な問題ではないと思う。旧市外電話局を全部横浜ユーラシア文化館にしたとしても、横浜ユーラシア文化館であることには変わりはない。それが出来ないのであれば、止めた方がよいだろう。

（吉田委員長）

・資料３にある横浜開港資料館と横浜都市発展記念館の展示スペースを横浜開港資料館へ一体化する案は、収蔵庫が増えるだけではないのか。横浜の歴史からすると、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館は特別な存在であり、横浜ユーラシア文化館による国際形成は重要ではあるが、少し抵抗感はある。一つの案としては有り得るだろう。

（永池委員）

・学校教育では、１学年約３万人の子ども達がいる。最近つくづく感じることは、インターネット時代であり、情報を得る際もキーワードさえ入力してしまえば様々なことが検索できる時代にある。だからこそ、実物に触れることや様々なことを体験型でガイダンスを行いながら子ども達に体験させることが重要であると感じている。西野委員が発言された旧市外電話局を全部横浜ユーラシア文化館にすることについて、横浜ユーラシア文化館だけでは子ども達は行かないだろう。社会科体験学習では様々なことが要求されており、校外学習で外出できるのは１～２回／年間である。横浜ユーラシア文化館は素晴らしいからこそ横浜市歴史博物館と一体化し、体験できる場を子ども達に提供して頂けると、学校利用で訪れた際に子ども達が興味を持てば、夏休み等に親に連れて行ってもらい自主学習につながっていく。素晴らしいものでもその場に連れて行かなければ子ども達は良さを発見できない。横浜ユーラシア文化館の収蔵品はそれぞれ素晴らしいが、教育の中に素晴らしいものだからこそ取り入れていくというスタンスでいくと、子ども達が行く可能性のある場所で上手くガイダンスしながら案内していくことも必要だろう。

（西野委員）

・横浜開港資料館と横浜都市発展記念館にも同様のことが言える。素晴らしいものであれば子ども達を連れていくべきである。

（永池委員）

・吉田新田が中心となると、利用するのは４年生となる。吉田新田は地域教材を扱ったものであり、横浜市は「点」で行っているが、地域によって利用している学校とそうでない学校があり、必要に応じて利用している状況である。横浜市歴史博物館と横浜開港資料館、横浜都市発展記念館では利用する学年が異なる。

（吉田委員長）

・これまでの議論を整理すると、現在の施設以外にはスペースがないという条件下で４館のより一層の活性化を考えると、一案目は、横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館と一体化し、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館を一体化する、二案目は、旧市外電話局を横浜ユーラシア文化館とし、横浜都市発展記念館と横浜開港資料館を一体化し外部倉庫を借りる、三案目は、横浜ユーラシア文化館は博物館というより、むしろ収蔵館、資料館としてコレクションを維持管理することに特化し展示を重要視しない、ということである。三案目は場所の問題とは関係ないが、重要な案の一つである。

（生涯学習担当部長）

・嶋田委員が発言された、他に使用可能な施設があるかどうかについて、経済局に話をしてみる。

（吉田委員長）

・四案目は、新たな施設を設けるべきであり、それ以外に方法はないというものである。

（嶋田委員）

・横浜ユーラシア文化館を情報文化センターの上層階へ移転させ、横浜都市発展記念館は旧市外電話局にある方が、建物との釣り合いからすると良いだろう。

（吉田委員長）

・横浜ユーラシア文化館の場所としては、横浜市歴史博物館や情報文化センターの上層階が考えられるということである。私も旧市外電話局は横浜の歴史そのものであり、横浜都市発展記念館がマッチしていると思う。

（平川委員）

・報告書に当検討委員会として是非書いて頂きたいことは、東日本大震災の後、我々の価値観の転換を求められている。地域の歴史文化というものが地域形成の基盤になり、その一番の担い手が博物館、資料館であると思っている。地域のあらゆる資源、歴史文化が蓄積され、それを基盤にしていかなければならない。それは費用対効果に置き換えることができるものではない。

（吉田委員）

・来館者が少ないことを指摘され、当検討委員会が立ち上がった経緯もある。それに対し何か答えを出さなければならない。

（平川委員）

・提言をした上で、根本からその様なことを考えていかなければならない。

（末崎委員）

・横浜ユーラシア文化館も横浜都市発展記念館も、これまで大変な蓄積、研究をされてきている。それらを無にしない、発展型にしていかなければならない。

（吉田委員長）

・我々は各々の館の学芸員、研究者の努力は最大限斟酌すべきである。博物館の重要性、地域の歴史文化の基盤であることを延べ、尚且つ活性化させるためにはどの様な方法があるかを述べる形の答申案となると思われる。

（長島委員）

・教育テーマとして重要視されているのは、横浜らしさである。歴史を持ちながら国際都市である横浜らしさが活きるような、当検討委員会においても横浜らしさを考えたのだと納得して頂きたい。

（吉田委員長）

・博物館の地域における重要性は横浜らしさにも関わりがあり、市民の方にも知ってもらう必要性がある。また国際的でなければならず、４館は十分な意味を持っているということを述べ、尚且つ４館を活性化するにはどの様な方法があるかを述べる形となるだろう。その案はまとまらなかったが、いくつか出された案を併記するしかないだろう。横浜ユーラシア文化館を横浜市歴史博物館へ移転することは、様々な事情を斟酌しなければ一つの案として有り得るだろう。横浜ユーラシア文化館と横浜市歴史博物館が一体化し、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館が一体化するという案は、これでなくてはならないという訳ではないが、一つの案として有力である。同じお金をかけるのであれば、横浜ユーラシア文化館にお金をかけてもっと充実させる案も有り得るだろう。

（永池委員）

・博物館の重要性を学校教育に取り入れ、日常的にその様な場所へ連れて行くような学校教育の展開を考えなければならないと、改めて感じた。

（平川委員）

・資料７のアンケート結果にもあるように、若い世代がこれ程自分達の地域、国の歴史文化に関心がない国も珍しいのではないか。一方で、横浜市民の横浜に対する愛着は感心させられるものがある。

（末崎委員）

・子どもが興味を持てば、学校利用の後も親や祖父母を連れて来てくれる。

（長島委員）

・子どものみならず、親も自分が楽しめる場所へ行きたがる傾向がある。

（末崎委員）

・施設内全部は無理でも、どこか一ヶ所にその様な場所があると良い。

（長島委員）

・施設内の売店のソフトクリームが美味しい、そんなことでも来てくれることもある。

（嶋田委員）

・生涯学習というキーワードも、是非使って頂きたい。

（吉田委員長）

・学校教育だけでなく生涯学習についても４館は是非取り組んで頂きたい。

（事務局）

・次回（第５回）検討委員会では本日の議論を踏まえ、まとめとしたものを用意させて頂く。博物館的意味や各館の実績評価、横浜と地域における重要性、横浜らしさについて延べ、その上で個々の案を述べる。また、当検討委員会は横浜市外郭団体等経営改革委員会からの指摘を受け開催されているため、集客や収蔵庫の問題、学校教育、分かりやすさ等、様々な観点もあり、それらも踏まえた形でまとめさせて頂く。

（吉田委員長）

・まとめ方について何か委員から意見はあるか。また、資料は検討委員会開催前に予め送付して頂くこととする。

（委員一同）

・特に異論なく、了承された。

４　その他

第５回横浜市文化財施設のあり方検討委員会

日時＝平成 23 年 12 月 21 日（水）午前中

場所＝具体的な場所は後日連絡する